
バミューダ・トライアングル～Triangle of Terror～

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バミューダ・トライアングル Triangle of Terror

【Nコード】

N1867S

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

ついに始まる恐怖の怪談。此の怪談が語り始めた時、空気は凍てつく。

第一話 怖い歴史

二次大戦の頃、戦闘機がバミューダ海域で落とされたり、船が座礁したり撃沈されたりして、海は、死体の海と化していた。

そして、二次大戦終了後、悲劇の幕開けが始まった。

あるとき、その海域を渡航していた船一隻が謎の霧に包まれた。

船長は、こう言ったの。

「今日は、霧が出るなんて一言もラジオは言っていないぞ。」

その時、ラジオを聞こうとしたがラジオが壊れてしまった。

「おかしいな、おいっ！」

船の外にいた少女の足に軍人の手がガシッとつかんだ。

「助けて！きやあああああ！」

「どうした？なんだこりゃー！」

軍人たちが、船から登ってきたのである。

「死んだはずじゃないのか・・・」

船長は、太陽を覆い隠す存在に気がついた。

「私の名前は、バミューダ。これよりこの海域を穢した復讐を行います。殺りなさい自らの人生を穢した軍人さん達。」

「うつうつらうつらうつら」

ゾンビを操るバミューダ。彼女は、海を守る妖怪である。

二次大戦のせいで穢れた海を守り続けている。此の船はその餌食になってしまった。

船はまだ沈没していなかった。

バミューダによってとどめを刺される運命にあった。

船客の者たちは、みんな軍人ゾンビに食いちぎられて殺されていた。

少女は心臓をえぐられて更には、両足を食いちぎられていた。

船長は、顔面がずたずたに引き裂かれて、両腕も食いちぎられていた。

跡形もない顔面から脳の一部が顔を出していた。

バミューダは、大きな鎌を持っていた。

「跡形もなくなりなさい！」

バミューダは、大きな鎌を振り翳した。

船は粉々になり、天に舞い光を放ってから消えた。

バミューダはため息をついた後、消えていった。

霧も晴れて、船があつた場所には血の色をしていた。

そしてそのあと、いろいろな場所で惨劇が起き、残るのも一部しかなかった。

時は流れ、2010年6月15日になった。

バミューダ・トライアングルの謎を研究している考古学のチームが日本にあつた。

「都市伝説になつちまつたのか。」

若き考古学者、浅生護^{あそうまもる}。21歳。

「都市伝説でも科学で突き止める。それが私のやり方なのよ。」

美しき考古学者、立埴菜都子^{たてしきなつこ}。32歳。

「都市伝説じゃなくて、事故という見方だつてできる。」

へそ曲がりな考古学者、金林神司^{かなはやしんじ}。46歳。

「事故とか、科学で突き止めるなんて最初から無理だよ。」

オカルトチックな考古学者、和瀬別府佐戸雨^{わせべつぽうさぬ}。40歳。

「何にせよ、突き止めることが大切だからな。」

チームのリーダー、常廣韓七郎。つねひろかんしちろう 38歳。

此の五人とは別に船を運転する人物が1人。飛行機を運転する人物が1人いる。

此の二人は、アメリカ人である。

5人は、バミューダ・トライアングルの怪談についてアメリカのいろんな所へと回った。

いろいろと怖い情報を手に入れた。

「本気で言つと怖いぜ。」

護輅は少し体をびくびくさせていた。

第一話 怖い歴史（後書き）

次回 第二話 行くか？行くまいか？。お楽しみに！

第二話 行くか？行くまいか？

護輅は、ゾクゾクする気持ちを抑えていた。

「護輅、バミューダ・トライアングルの怪談は科学で突き止めれると俺は思う。」

金林は、科学で突き止めようとしている。

「2人のアメリカ人を紹介するぞ！船を運転する者と飛行機を運転する者だ。」

此の二人は、ケン・ディスカとゾーイ・ジョージアである。

「バミューダ・トライアングルの謎を知りたいのなら一緒に行きましょう。」

韓七郎は、やる気のない3人を見て苛立ちを見せていた。

「事故でも、災害でもないなら何なの？」

「怪談だって言っているだろ！菜都子、一方的な態度のせいで人気のない考古学者になっているのだ。」

「違うわ、だったらあんた達はどうかなの？」

「俺達は、いろいろな視点で確認して結論を出しているだけだよ。」

「そうなの、私は一回目はパスよ。」

「怖いからか？」

「違います。」

韓七郎は、怒りながら言った。

「今回は、運転手を含めて3人が行け！とくに菜都子と金林だ！」

第二話 行くか？行くまいか？（後書き）

次回 第三話 悲劇の始まり。お楽しみに！

第三話 悲劇の始まり

韓七郎の言い方を気にしていた菜都子だがしぶしぶながら行くことにした。

「本当は怖いから、そう言っているのだろ。」

「うるさい、金林さん。運転手さんが迷惑をかけますよ。」

「大丈夫です。良い争いにはよく耐えて集中しているタイプなんで。」

3人はバミューダ・トライアングルの海域に入った。

「ただいま、バミューダ・トライアングルの中に入りました。」

通信をしている運転手の応答を韓七郎が了解をした。

「あと6キロメートル進んでくれ。」

「分かりました。異常がなかったら帰還します。」

「了解。」

しかし、曇り空に突然なり始めた。

「なんだ天気は晴れだって言うのに。」

「どうしたの?」

彼らの船はの周りに何やら集まりが漂ってきた。

「げっ、リーダーが壊れたぞ。こちら、バミューダ・トライアング
ル内部、韓七郎さん応答してください。ってあれ、通信機がつなが
らない。」

「んな、馬鹿な。もしもし、応答しろっ！確かに壊れてる。」

その時、菜都子が悲鳴を上げた。

「どうした。菜都子さん！」

二人は、ゾンビを見た。

「な、何ですかこれは。」

「幻じゃないぞ。」

「船を動かして振り切れ！」

「分かりました。」

「菜都子さんどいてください。此处は俺が相手をします。」

「金林さん。」

運転手は、再び焦った。

「エンジンが壊れた！どうしようー！」

運転手を光の閃光が襲い、運転室は赤く染まった。

「俺たちどうなるんだ。」

「なに、あの光こっちに来る。」

金林は、上半身を半分切られた後、船は真っ二つになった。

「いや、嫌よ。」

「さあ、貴方も冥土に落ちなさい。」

「誰？」

菜都子は、ゾンビに食われて心臓だけが残った。

そのあと、船は跡形も無く消された。

第三話 悲劇の始まり（後書き）

次回 第四話 不自然さ。お楽しみに！
このお話は、全五話で終わっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1867s/>

バミューダ・トライアングル～Triangle of Terror～

2011年10月9日22時52分発行